

アートを通じたデモクラシー (講演要旨)

田中 稔子

1) 1945年8月6日、6歳と10ヶ月(小学校1年生)の時、広島爆心地から2.3キロ地点で、原爆を受ける。その1週間前まで爆心地に住んでいたが、強制疎開で転居。しかし転居先もキノコ雲の下。火傷と放射能を受け、その後遺症に長年苦しむ。爆心地にあった、元の小学校のクラスメートは全員、今も生存情報が無く、一人生き残った者の負い目と、トラウマから、原爆の事を家族にも語る事ができなかった。

結婚後、七宝工芸に出会い、自身のトラウマを癒す為に、大型壁面七宝という新しい分野を開拓。作品に、核の恐ろしさ、死者への追悼、平和への祈りをメッセージとして込める事が自身への癒しとなった。日展、現代工芸展の常連作家、又主婦として、多忙な中を2008年、ピースボートの「被爆者地球一周証言の航海」に参加。南米ベネズエラで政府高官や、ラグアイラ市長・トレド氏に会った時、「被爆者は核兵器が使われた時の実相を、世界に話す責任がある」と言われた事が胸に響き、初めて現地の衛星放送で、被爆体験を語る。下船後70歳から、ニューヨークの国連NPO、ヒバクシャストーリーーズや、ピースボートの要請で、独自の証言活動を始める。

2) 人は夫々に、生まれ持った特質で、思いを表現する力を与えられているのではないだろうか。私の場合は紆余曲折の上、27歳で出会った壁面七宝アートが表現のツールとなり、それが入口となり、地球を終末に導く核兵器の恐ろしさ、そして2度と使われない事への願いを、世界に伝えている。

目下、ロシアによるウクライナへの侵攻で、戦争現場の惨状、市民生活の悲惨さを連日メディアが報道している。そして、あろう事か、今迄タブーとされてきた核兵器の使用が、現実味を帯びて来た。被爆者として、とても許し難く、力の無い自身に焦燥感が湧く。そんな時、過去にウクライナのキーウやチェルノービルを訪ね、そこで知り合った、原発事故の被災者、タマーラさんからメッセージが届いた。「被爆者の田中さんは、核兵器の恐ろしさを世界に発信し続けて下さい」と言うものだった。またロシアのYouTube放送からも、1時間番組で、被爆の実相を話すよう求められて出演した。両国は歴史的に、兄弟の様な国同士。以前、私が両国を訪ねた時の感覚では、相手を敵国と位置づけている様には思えなかった。その時の国の指導者次第で、悲惨な戦争が起こり、領土や覇権をめぐり、庶民は否応無しに戦闘に巻き込まれ、何万人とも言われる大勢の貴い命を奪う。

3) 2009年~2015年、ニューヨークでの証言活動では、招かれた被爆者が手分けして、約4万人の高校、大学生に証言したが、「原爆が戦争を終わらせ、多くの米国民の命を救った」と反論も出た。しかし実際の体験者の話を聴く内に、最終的に核兵器を使用する事への拒否

を表明するに至った。昨年 2022 年 11 月、ニュージーランド、オタゴ大学で開かれた「核に関する環太平洋各国連携国際会議」に招かれて渡航。若い研究者や学生達の熱心な活動に触れ、核兵器や原発の問題は、北半球(Global North)だけではなく、福島原発事故の排水問題など即、南半球 (Global South) の問題である事を痛感し、地球全体が国境を超えて取り組まなければ核問題は解決しない、と改めて感じた。会議からは、参加者が平和への思いを込めて折った千羽鶴を託され、12月19日、広島平和公園の原爆の子の像に、無事捧げる事ができて嬉しく思っている。そして2021年発効した核兵器禁止条約を各国の指導者は、理想論と一蹴せず、もう一度読み返し、見直して欲しい。世界が戦争に突き進むばかりの今こそ、核兵器の無い平和な世界を作る事への、市民と為政者の意識転換が求められる。



“Peace Exchange Space”

2016年自宅にアートギャラリーと証言スペースを併設した「ピース交流スペース」を開設。国内外からのべ5,000人以上が訪れている。



Tree of Hiroshima
「いのちの木」

1990 Enamel mural (180x90 cm)
第 22 回日展



Prayer

立体モニュメント

1991, twin monuments
(430x140cm, 250x120cm)
consists of enamel panels with
peace message by 450+ people



Peace Ring